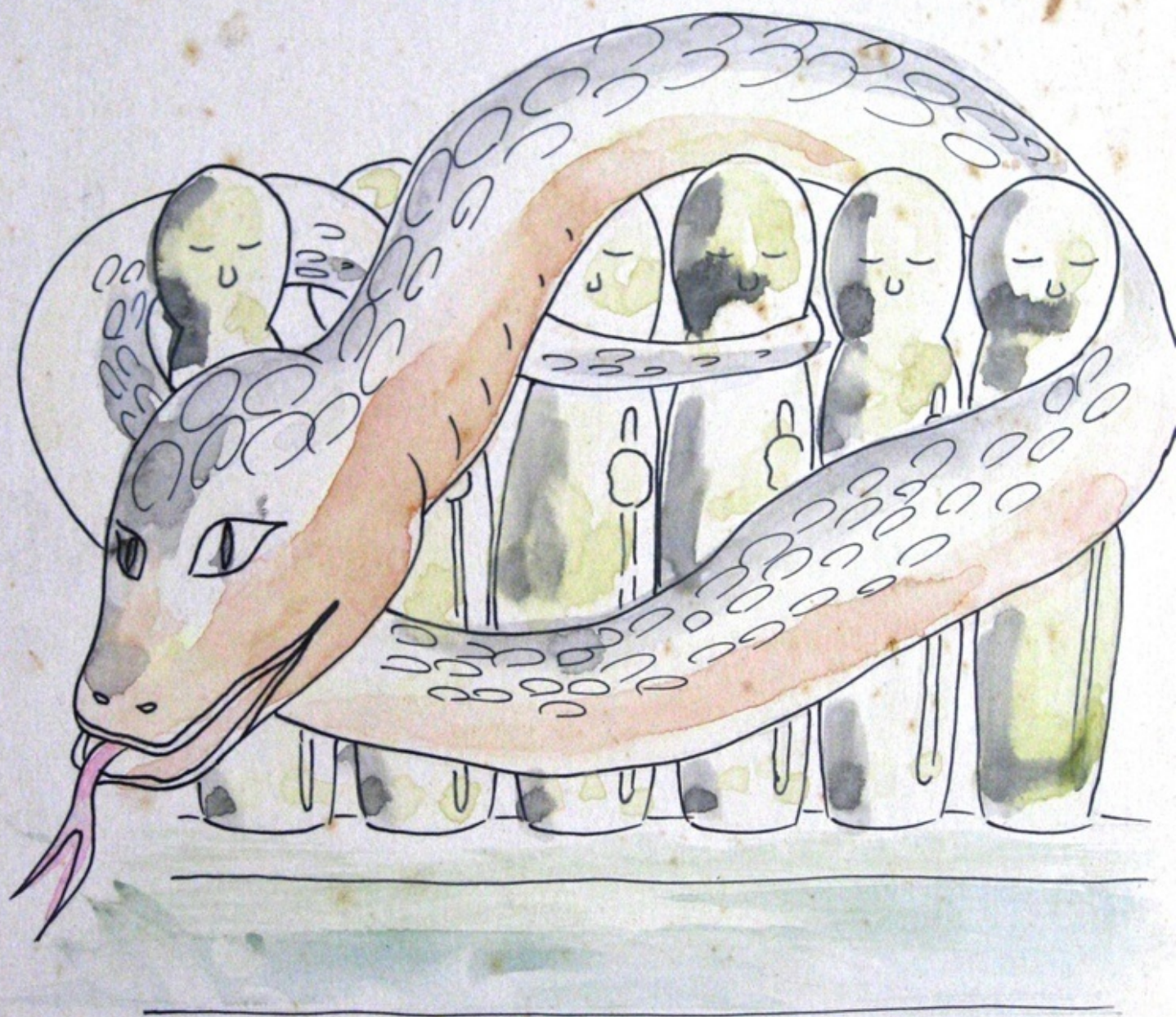


六地蔵



作画・松井 茂

愛知県鳳来町に六地藏というところがある。

その名のとおり、今でも小さなほころの中に

六地藏様が六体、ひっそりとならんでいる。

なぜ、六地藏様がつくられたのか、

これには、わけがあるのじゃ……。



昔、昔、まだ六地藏という地名もなかったころ、

この村に、一人の若者があらわれたのじゃ。

鼻筋のとおりた。それはそれは

いい男じゃった。

「一体、どこの衆じゃ。」

「すてきなお方」

「何をしにきたんじゃ。」

村人たちは、ひそひそとうわさしあったのじゃ。

だが、その若者は、

ふりむきもせず、どんどん山へ登っていったのじゃ。

「いったい、どこへ行かれるのかのう。」



山を登っていくと

そこは高野という村であった。

高野の人々も若者のあまりの
リリシさにおどろいた。

「ほお、りっぱな若者じゃのう」。

「ぜひわしの家のむこになってもらい
たいものじゃ」。

と、年ごろの娘をもつ親は
みな考えたのじゃ。



その若者は、庄屋の家まで来ると 足をとめた。

なぜかって？ それはのう……

家の中からこちらをじっと見つめている娘が気にいったからじゃよ。 若者は、一目見るなり娘が気にいり、

又、娘も若者が好きになった。

二人はもう目があうだけで心が

通じたのじゃ。

それは不思議といえは

不思議なであいじゃった。



やがて若者は庄屋の娘と結婚した。
二人の仲は、村の人々がうらやむほど
よかった。

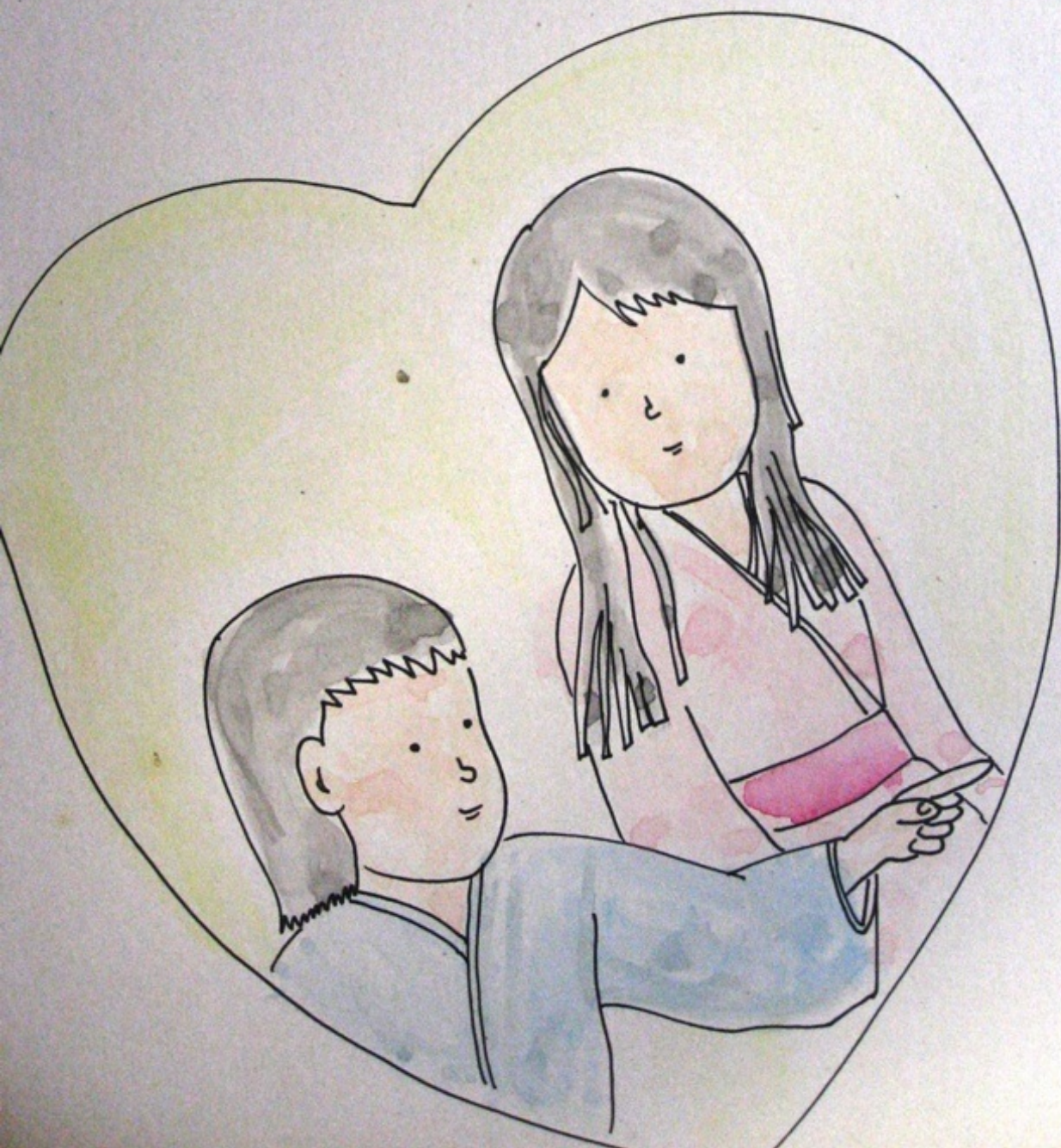
そして娘は身ごもった。

「元気な子を産むわい。」

娘は最高に幸せであった。

しかし

娘には気にかかる事が
一つあった。



娘は決して口には出さなかったが、
村人が寝静まる頃になると、
夫は行き先も告げずに
どこかへ でかけて
しまふのじゃ。



とうとうある晩、娘は夫の後と
つけてみることにした。

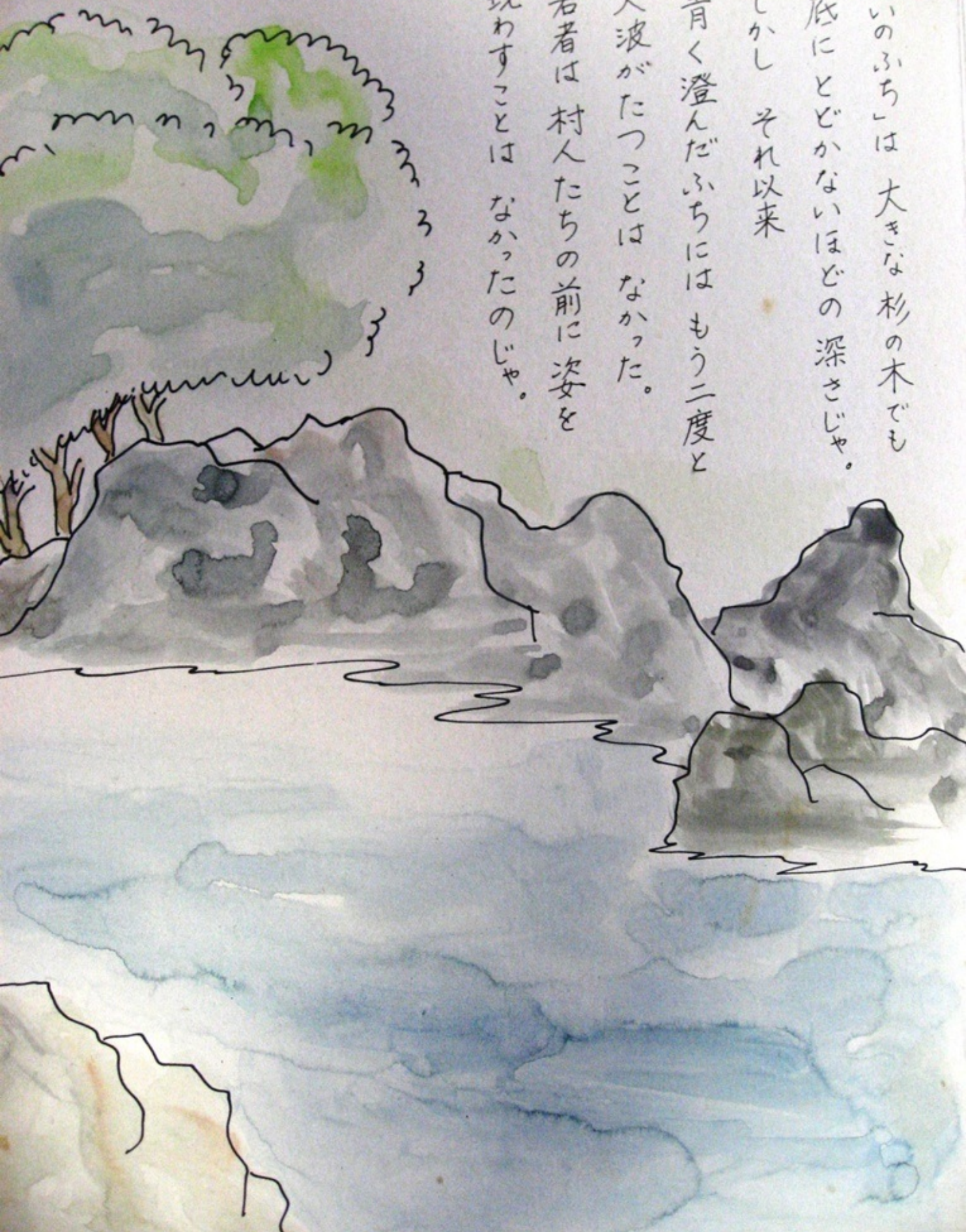
「いったいあの人はどこへ行くの
でしょう。」

夫は高野をおりて、赤峰川の
本流となる黄柳川のほとり
までやってくる。妻の姿に
気づいたのか、突然大きな
白蛇の姿になり、

「いのふらにザンブリと
飛び込んだのじゃ。」



「いのふち」は大きな杉の木でも
底にとどかないほどの深さじゃ。
しかし それ以来
青く澄んだふちにはもう二度と
大波がたつことはなかった。
若者は村人たちの前に姿を
現わすことはなかったのじゃ。



十月^{とつき}にち、娘は子供を産んだ。

ところが おどろいたことに

産まれた子供をみれば

たらいに七杯ものへびの子じゃった。

娘はもちろんのこと。村人たちは、

「おそろしや おそろしや」

「たたりじゃ」

と、ふるえあがった。



産まれたへびの子は 村人に 気味悪がられ、
すぐさま 高野の下を流れる 赤峰川に
捨てられた。

へびの子を捨てた所を 村人は
「七たらいぶち」と呼んだ。



村の人たちは

こんな怖いことが二度とおこらないように
供養することにした。

こうして 建てられたのが
ほら、この六地藏様なんじゃ。



「いのふち」は今ではすっかり
浅くなって 昔の面影が
うすらいできた。
しかし「せたらいぶち」には
へびの化身なのか
今でもまっ白い魚が
姿を見せるという。

